
短編小説 千手観音

くりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説 千手観音

【Nコード】

N7138V

【作者名】

くりこ

【あらすじ】

真夏のホラー2011出品作品です。

ズバリ怪談です。

水樹と正男が訪れた湖畔のホテル。その夜水樹を襲った者たちとは

……

以前に書いた長編小説の番外編を改稿しました。

山梨県河口湖某所。湖畔を望む瀟洒なホテルへ、私（水樹）は恋人の正男と二人で遊びに来ている。

施設屋上にある露天風呂。正面には、茜色の夕焼けを背にした雄大な富士山が、河口湖上に浮かんでいるような眺望だ。身をゆだねてるこの湯船が、湖面に同化して見える造りの岩風呂が楽しい。

平日だから宿はガラガラ。一応誰も居ないのを確認し、童心に戻った私は湯の中を大の字に泳ぐ。柔らかな波が身体を撫でてゆき心地よい。

富士山のふもとなので、昼間は暑くとも日が沈む頃には温度は下がった。湯水より肩をさらすとひんやりする。湖から届く風が、近い秋の訪れを感じさせた。

風呂上がりには宿の浴衣に袖を通す。女性の宿泊客がそれぞれ自由にデザインを選べる趣向で、私は藍色に大胆な向日葵柄のをチョイスした。

こんな浴衣を着て、ひと昔前に正男と平塚の七夕祭りへ行ったのを思い出す。

浴衣ってのは良い。襟の後ろを拳ひとつ分抜き、うなじを出せば、凜とした大和撫子に変身だ。娘時分には、ミス七夕に勝るとも劣らない……とか何とか言われたような記憶がある私だし。鼻屑目に見ずとも、若い頃と大差ない容姿に一応は満足しておく。

そして。浴衣は恋する者には情緒纏綿。雰囲気づくりにも最適なんだ。あの祭りの後だって、大い々に盛り上がったもんサ。へへへ。つられて、この後のスケジュールも連想した私は、脱衣所の大鏡の前でひとりニヤニヤと笑んでいた。

色々とあった私と正男だが。絡まっていた糸は、とりあえず解くことが出来た。誤解と言う名の氷塊もとうに溶けている。なんとかヨリを戻し、昔みたいな関係へ少しずつ歩み出してる私達だ。

忙しい仕事も、今日はどうか都合をつけてくれた。なにやらまた、お得な宿をインターネットで見つけたらしい。割とこまめな男で、度々こうして小旅行を企画してくれる。贅沢はしていない。おかた安近短の範囲内だけど、正男の心使いが私は嬉しかったんだ。

かつて負ってしまった傷跡を癒し、埋め戻すつもりで。私達は、失っていた時間を全部取り戻してやろう、とやっきになっている。以前よりも二人で過ごすことを大事にした。元々は仲良くやってたウチらだ。再び訪れた新婚時代のような生活は、結構楽しかったり

もした。一泊二日の今回も、そんないつものささやかな休暇のハズだったんだけど……。

夕食も済み、二度目の風呂から部屋へ戻る。十畳一間のオーソドックスな和室。先に戻っていた正男は、床の間にあるテレビのほうへ顔を向け、ふたつ並んで敷かれた布団の片方へ寝そべっていた。

彼の浴衣姿は私的には結構お気に入りなんだ。身丈があり、すらりとしてる人だからサマになる。宿の屋号入りの浴衣だが、そんな代物でも男ぶりは上がる正男だ。私は濡れたタオルを干しつつ、横目で年下の夫を見やる。

「良いお湯だったあー。今度の女湯はほぼ貸し切りだったよ。さつき雲に隠れてた富士山がドーンと現れてさ、銭湯の絵みたいだった。正男はどうだった？ 男湯……」と話し掛けるも、返事はない。振り返れば我が恋人は、すでに高いびきの人である。

夜勤が続いてたから仕方ないけど……。せつかくのお泊まり会なのに、そりゃあ無いんじゃない？ おニユーのフリフリなブラとか、この浴衣の下へ仕込んだじゃってる私の立場は……。

幸せそうなマヌケ面で寝てる正男の鼻を、エイツとつまんでやったが。疲れてるのが、まるでびくともしない。

ちえっ。なんだよ、なんだよ！ 今夜のアッチはお預けかあ？

仕方ないので、そんな正男へ渋々と布団をかけてやる。

つけっぱなしだったテレビも、特に必見する面白いモノは無かった。故障気味だったのか次第にノイズが酷くなり、終いには何も映らなくなる。

全く、テレビまで馬鹿にしてるんだ。憂さ晴らしにフロントへ、文句のひとつやふたつ電話してやるうかと考えたが。夜も更けたし、正男が起きる気配はない。風呂上がりのビールも効いてきて面倒臭くなり、結局は私も休むことにした。

寝床についてからだ。

正男の豪快ないびきの合間に。カタン……カタンと耳障りな音がするのに気付く。非常灯のみの薄暗がりの中。辺りへ目を凝らすと、音源は床の間にあった掛け軸であるのが分かった。空調の風を受け、どうやら壁に当たるらしい。イビキは防ぎようがないから、せめてコチラくらいはおとなしくさせようと私は思い立つ。

掛け軸を外す。明日の朝にまた元に戻せば良さ。と、その時はそう単純に考え、私はまた布団へ潜り込んだ。

そうして。どれくらい時間がたっただろう。

ひどく喉が渇き、私はふと目を覚ました。障子向こうを見れば、窓外はまだ暗い。

水を飲みたくて起きようとしたが、身体はどうしてか動かなかった。寝ぼけた頭で何が起きてるのか理解するのに、しばらくかかる。やがて。この現象が、俗に言う金縛り？ と気付くのに、数秒を要した。

非常灯のダウンライトが点滅し、消えた後だ。

暗闇の部屋奥。目の端に、何か白っぽいモノがさわさわと蠢くのが見え、ギョツとする。動けぬままの私は息を飲んだ。

それは何と、人の手だった。

手は手だ。畳から、肘より先の人間の手がニユウツと突き出ている。淡い燐光を放つ華奢な白い手。オナナの手だろうか。何かを探すように、閉じたり開いたり宙を妖しく掴む奇怪なソレは、あるうことが一本二本と増えていく。雨後の筍みたいに生えて来た奴等は、そのうち十本を超えた。

すると。ソイツらは畳の上を滑るように移動を始める。爆睡中の正男の周りを、ザザーッとろつく。

異様な光景を目の当たりにし、動悸が加速する。そのうち、眼があつた……。つてのはおかしいんだが。一連の動きを見ていた隣りの私へ、奴らが感づきピタツと足を、イヤ手を止めた。

手は、今度は進行方向をコチラへ合わせ、まっすぐやってくる。私の心臓は凍り付く。逃げようともがくも眼球以外、身体は微動だにしない。

一瞬視界から一同が消える。固唾を飲み、冷や汗だけがにじむ中。横たわつてる私の足元へ、手が手が伸びてるのが分かった。氷のように冷たい指どもが触れた瞬間、私は「ヒッ！」と縮み上がる。

魔の触手は足先より這うようにして昇ってくる。寝相が悪かったから、浴衣はとうにはだけてた。露になってたらしい太股から腹から、ゾロゾロと奴らが這うのが分かる。

恐怖で失神寸前。むしろ気絶したほうが楽だったろう。鎌首をもたげる蛇みたいな手の集団が、胸元へ到達した刹那。私は声にならない声で「助けてえっ、正男おっ！」と叫ぶ。

その時だった。

偶然か以心伝心か。

寝返りを打った正男の尻から、闇をつんざくほどの大怪音を発せられた。

音の正体はつまりその……放屁だ。割れたラッパみたいな正男の見事な屁が、キンと張り詰めていた空気を打破した。

音が匂いか。どちらが異次元の者共に不快だったのかは分らない。

最初の一発目で手たち、はビクンツ！ と硬直した。二発目のさなる大波動の後。異形の者どもは畳の沼へ沈むようにして、次々に姿を消す。トップンと水音を立て、最後の一本が沈んでいく際にバイバイ！ と左右に振ったようにも見えた。

歪んだ畳の水面へ波紋をひとつ残し、物の怪どもは跡形もなく去ったのだった。

翌日。私は正男へ、昨晚の世にも奇妙な珍事を細かに話す。浴衣のまま胸元をぼりぼり搔いていた彼だったが、オチを聞いてゲラゲラと笑い出す。

「オレの屁も役に立つんだなあ、水樹。そんな威力まであったなんて……スゲえな、屁力！ 侮れねえー」

感心しきりな正男の頭を、私はペシッとひっぱたく。

「ちよつとお！ 笑いごとじゃないよつ！ そもそもアンタが先に

寝込んだりするから、私があんな目に遭ったんじゃないのっ！ だいたいねえ……」

正男が笑いながら床の間の掛け軸を拾う。昨夜は気にもとめなかったが、表には千手観音の日本画があった。よく見りゃあどことなく薄気味悪い絵柄だ。菩薩様のお顔も心なし淫靡だし。あんまし宿の部屋でお目にかかる構図じゃない。

すると。何気なくひっくり返した正男が「うわあっ！ なんだこりゃあ……」と声を上げる。

掛け軸の裏側。

まるで何かを封じ込めるかのように。裏面へびつしりと貼られていたのは、なんと御札であった。黄ばんだそれらを目撃した私は、改めて身の毛が総立ったんだ。

正男がフロントマネージャーを呼びつけて、被害状況を話す。しかし、メンツの問題なのか。当然と言えば当然だが、ホテル側は最後までオバケ云々の出現を認めようとはしなかった。

だが、お札の気味悪さの非だけは認めた。「宿泊代はお一人様分で結構ですので……」と提示してきたから、やはり曰く付きの部屋であるコトは承知していたようだ。虫の居所おさまらぬ正男は尚も食い下がったが、私はもういいよと諭した。

「なんかゴメンな、水樹。やっぱり安い宿つてのは、こうゆうハズレがあるのかなあ。てゆうか、俺が先に寝なけりゃよかったんだけどさ。昨日はどうにも眠くって眠くって……」

荷物をまとめながら正男が言う。この人があんな風に寝込むのも、よく考えれば奇妙なことだった。テレビや電灯のこととか、今にして思えば怪しかった点に気付く。

私が掛け軸と共に、御札を外してしまったことが怪奇現象に繋がったらしいが。アレは果たして一体全体何だったのか？ なんてのは、とどのつまり解らず終いだった。

正男の盛大なオナラが、邪気を祓う柏手みたいな役割でも果たしたのか。なんとも滑稽極まりない顛末だったけど。隣りのこの騎士が頼もしくも可笑しくて、私は吹き出しながら宿を後にした。

帰路の途中に立ち寄った土産屋。

桃を直売してる店先に、甲斐犬の親子が居た。生後半年も経たないか。黒くて丸々太った愛らしい子犬たちは、熊の子にも見える。母犬に断り、思わず一匹胸に抱く。腕の中で力強い足が突っ張る。柔らかな毛。円らな黒い瞳がなんとも可愛い。

店主の「良かったら貰ってつてよ。犬はイイよ。魔除けにも、番犬にもなるからね」との言葉に、正男が目を輝かせる。

「名前、何にしようか？ 水樹」

正男が笑い、私も笑みがこぼれた。

——完——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7138v/>

短編小説 千手観音

2011年10月8日19時12分発行